

書名：クマゼミの島

著者：島本寿次

出版社：学習研究社

出版年月：1972年6月

総ページ数：200ページ

ISBN：4050035316

推薦者

工藤慎一

鳴門教育大学大学院准教授

自然系コース（理科）

「我々人間にとって、学問・芸術の存在意義とは何であろうか？」、素朴に問えば「なぜ勉強しなければならないのか？」 学術に真摯に向き合った者であれば、おのずと自分自身の答えを見つけているであろう。答えを持たない者が教壇に立って白々しい借り物言葉を並べても、児童生徒の心の奥底に学術の火は灯せない。

私が紹介する本は、小中学校の課外活動を通じて、教師と児童生徒が様々な困難を乗り越えながら「生き物のなぞ」に挑んだ様子を綴ったシリーズの1冊である。子供向けの本であり、生物学的な記述には不適切・不正確な点も散見される。しかし、学術に身を置く喜び、そして学術を伝える喜びがそこには溢れている。学術を次世代に伝える職業＝教師に求められる本当の力とは何か？古い本ではあるが、この職業を目指す皆さんにお勧めの1冊である。

中学生の「勝ちちゃん」は、卒業そして就職を翌春に控えたある日、「田中先生」に言うのだ。『ううん、まだまだ調べたいことがいっぱいあるんじゃ。先生、来年わしを落第させてくれんかのう。(43頁)』 「勉学＝学術を修める」価値を、将来の実利のための手段や道具としてしか認めないとしたら、これほど貧しいことはない。「勝ちちゃん」をはじめ本書に登場する児童生徒が、あるいは田中先生が、このことをはっきりと伝えてくれる。

果たして今の日本の教育システムは、第2第3の「勝ちちゃん」を社会に送り出しているのだろうか？そして、「勝ちちゃん」の心を育む力量、学術の意義を次世代に余すことなく伝える力量を備えた第2第3の「田中先生」を、日本の教員養成系大学は輩出しているのだろうか？少なくとも、卒業研究に情熱を傾けるべき時期に採用試験対策に明け暮れるようなやり方では、このような力量をもった教師を育てることなど「夢のまた夢」である。大学における卒業研究は、義務教育から始まった勉学の集大成であり、まさに学生が先の問いの答えを見つける舞台なのだから。

